

井上士朗の書簡の紹介（二）

——道木正信氏コレクションから——

はじめに

本稿は、本誌四十九号掲載の「井上士朗の書簡の紹介——道木正信氏コレクションから——」の続稿で、道木正信氏コレクションの内、井上士朗の書簡十八点中、先の紙面の都合で掲載できなかった七点と、末尾に、先に紹介した8「騏六・巨川・雨滴・満子宛 七月廿日」書簡と合装された「巨川宛、九月十八日 窓竹斎烏川」（8・2）の書簡一点、合計八点を紹介する。この巨川宛窓竹斎烏川書簡は士朗の書簡ではないが、也有や暁台と交流のあった狂歌師の窓竹斎烏川が、暁台晩年の門人で清洲俳壇の新しい勢力となる巨川に宛てたもので、巨川に対する烏川の配慮がうかがえて興味深いものである。

なお、前稿は、梶山女学園大学学術機関リポジトリで公開中（https://lib.sugiyama-u.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=2472&item_

富田和子*

no=1&page_id=13&block_id=21)。

そこで、書簡及び図の番号は前回からの続きとし、凡例及び主な引用文献は前回に同じである。

まず、コレクションの一覧を再掲する。

- 1 宛名不明。九月十五日
- 2 宇洋（大津 塩屋新六）宛 八月十日（寛政・享和期）
- 3 碩外宛 九月十日（寛政・文政期）
- 4 松兄宛 十日（寛政十一（一七九九）年以前）
- 5 菊舎宛 六月三日（寛政・享和期）
- 6 魯隱宛 四月廿五日（寛政期）
- 7 秋湖宛 十月廿七日（享和三（一八〇三）年）
- 8 騏六・巨川・雨滴・満子宛 七月廿日（寛政期）
（軸は、巨川宛、九月十八日 窓竹斎烏川の書簡と合装）
- 9 帯梅宛 五月廿七日（享和・文化期）
- 10 墨山宛 八月廿三日（寛政・文化期）
- 11 杜石宛 十二月廿日（寛政・享和期）

- 12 兎農（杜農）宛 廿五日〔文化八（一八一）年頃〕
 - 13 舎員宛 十日（寛政期）
 - 14 五雄宛 四日（享和・文化期）
 - 15 宛名不明（寛政・享和期）
 - 16 士宅宛 十二月廿七日
 - 17 宛名不明 七月十日
 - 18 宛名不明。鶴の画入り。（寛政・享和期）
- 本稿では、12から18及び、参考として8の士朗書簡の下段に合装された巨川宛窓竹斎烏川書簡（8・2）の合計八点を紹介する。10と17は捲り、その他は軸装である。
- 次に、本稿で紹介する書簡八点の主な内容は次のとおりである。
- 12は、杜農から菓子をも、13は、舎員から料理鴨一箱を受け取った札状に句を添えたもの。
- 14は、いつ頃のものかはつきりしないが、士朗は既に寛政二年（三月五日）には「枇杷園花見」を行っている。これは、士朗の細やかな心遣いと花見会を成功させたいという強い思いが感じられる書簡である。内容は、五雄に明後日六日の花見会に奥方さまと一緒に参加いただきたいことと、東向きの対応はするので西向きの対応はよろしくと念をおして依頼したもの。
- 15では、弟子の卓池が参宮するので面会いただきたいと依頼し、お互いの健康を思いやっている。宛名不明ではあるが、12・13では添えた句が一句であったのに比べて三句も添えているので、大事な相手であろうと思われる。
- 16は、士宅から大晦日の御祝儀としてうけた銀札五匁のお礼と、添削した句を返すこと、そして毎年正月七日に開催している初懐紙の句会には少し早く来てください、待っていますと伝えたもの。士

朗の自筆ではなく写しであろうと思われるが、句について話し合いたいという思いが伝わる。

17は、門人の方明が訪問して世話になったお礼を述べた後、発句の添削で、重なることに關して、以前、三匙句合で「富吉や」の句でも評したとおり奇心である。「奇心ハ無儘義為候」と強く指導している。発句で重なるとは、季重なりを強く指摘したか？

18は、書簡ではないが、詞書のある句にふさわしい鶴の草画を添えたもの。

末尾に付載した8・2は、也有や暁台と交流のあった狂歌師の窓竹斎烏川が、暁台晩年の門人で、暁台没後、士朗門となる巨川に宛てたものである。巨川は8の士朗書簡に宛名のある雨滴・満子と同じく町家に住み、寛政期から騏六・琴宇に代わって清洲俳壇の新しい勢力となる人物である。折角、お立ち寄りくださったのに来客のため、早々に帰られた上、ご紹介した摺りものもできあがらず遅れていることを詫びている。清洲俳壇の新しい勢力である巨川に対する烏川の配慮がうかがえて興味深いものである。

（1）本稿（一）「8 騏六・巨川・雨滴・満子宛 七月廿日」（本誌四十九号（人文科学篇）三八頁・四五頁）参照。

12 兎農（杜農）^①宛 廿五日〔文化八（一八一）年頃〕
（軸装。一五・〇×三四・五糎）（図12）

結構の御菓子／被下候処、扱々辱／奉存候。面晤御礼／可申上候。
秋もはや／水に落たる／鳴子かな^②
といひ出候。

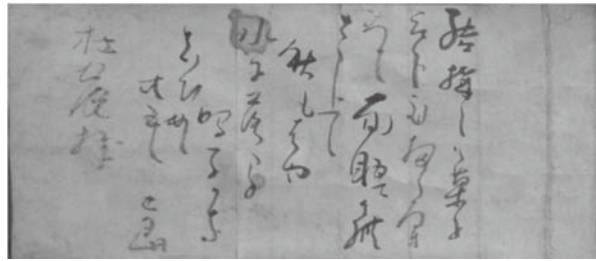


図12 兎農（杜農）宛 廿五日〔文化八（一八一）年頃〕（軸装）

廿五日 士朗
杜農様

- (1) 杜農＝「兎農」の別号、他に銀杏園。本名 大熊 善太郎。寛政三（二七九）年～慶応元（一八六五）年。杜農の号で文化十（一八一三）年の『阿沙野』に初見。のち兎農と改める。尾張藩士。百五十石の大番組で長久寺町に住み、のち馬廻組にかわる。士朗門。のち塊翁（竹有門）。『中京俳人考説』『俳文学大辞典』（面晤（めんこ）（名）面会すること。また、面会して話し合うこと。
- (3) 秋もはや水に落たる鳴子かな＝『四時行』（文化六）・『枇杷園句集後編』（文化九年）他に所収。

13 舎員宛 十日（寛政期）

（軸装。一六・三×四一・九糎）（図13）

時節為御見廻／料理鴨一箱／給辱存候。冬籠／の夜興^①にと楽ミ／申候。ほ句御尋／をかしき興も無之候。／このほど世外庵／吾事也。^③
世を余所に／雪見る柿の／梢なか／かく申出候。
十日 士朗
舎員様

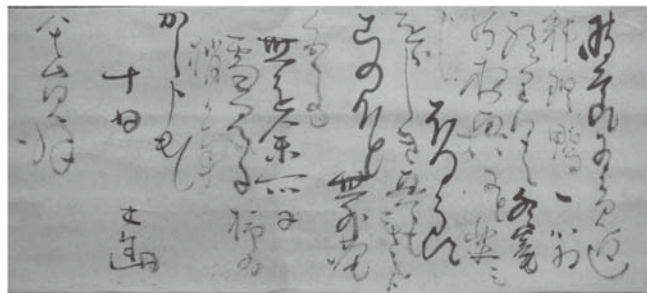


図13 舎員宛 十日（寛政期）（軸装）

- (1) 夜興（やきよう）（名）夜間のおもしろみ。夜の興趣。
- (2) 世外（せがい・せいがい）（名）世俗を離れた場所。世事を脱離した境涯。
- (3) 世を余所に雪見る柿の梢かな＝『柏声舎聞書』（卓池稿）所収。なお、『柏声舎聞書』の「柏声舎」とは（卓池の）青々処以前の別号。本書は表紙にそうあり、並んで「享和元年」（一八〇一）の年号が記してある。半紙本一冊、子持野九行、五十一丁。内容の大部分は他俳家の句録である。士朗の句が最多。『大磯義雄『芭蕉と蕉門俳人』（八木書店 一九九七年）より』

14 五雄宛 四日（享和・文化期）

（軸装。一五・〇×四七・五糎）（図14）

奉頼候。
明後六日七ツ時／花見会奥方様／にも御出可被下様／御通し可被下候。／別二廻紙出し／不申候間、西向ハ／ミなく奉頼申候。
四日
尚々此ほどハ／失礼いたし、其せつ／得御目二かゝり／不申候。東

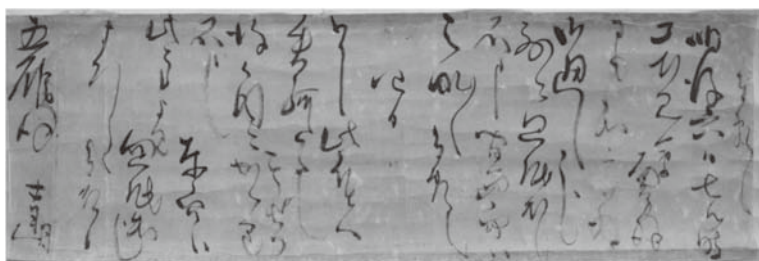


図14 五雄宛 四日（軸装）

向ハ／此方より廻紙出申候。／よろしく奉頼候。

五雄様 士朗

- (1) 五雄＝文政年間（一八一八～一八二九）没。通称 文助。富沢町に住む鋳師。士朗門。寛政十二（一二七）年の『玉くしげ』が初見。文化十一（一八一四）年の『はつ夢』の入集が最後。西国に俳諧行脚し長崎にて没、長崎市善林寺に墓碑あり『金鱗九十九之塵』。方明と『秋風紀行』（松兄跋「文化元（二八〇四）年刊」）を共輯。（『中京俳人考説』）
- (2) セツ時＝今の午前と午後の四時頃。こは花見会のため、午後四時頃。
- (3) 花見会＝士朗は寛政二年（三月五日）には『枇杷園花見』を行っている。（寺島徹「井上士朗年譜稿」『連歌俳諧研究』91、一九九六年九月）

15 宛名不明（寛政・享和期）

（軸装。一七・〇×四二・七糎）（図15）

初申^①卓池^②此度／参宮被致候。／御逢可被下候。／旧冬以来文／音なし。御壮福／奉賀候。当方／無事ニ御座候。／

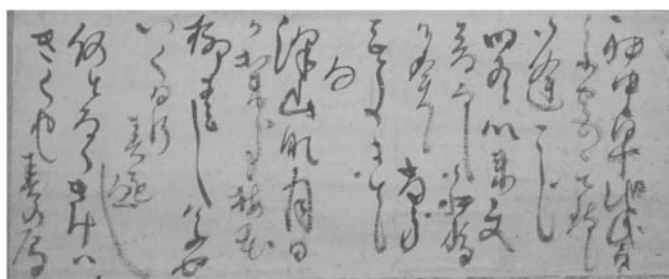


図15 宛名不明（寛政・享和期）（軸装）

三四

句

沢山な月日／が出来て梅花^③
柳青しけふや／いく日の春をへし^④

何となくきけバ／きく也春の雁^⑤

- (1) 初申「名」陰暦二月の最初の申（さる）の日。奈良の春日神社では祭礼が行なわれる。
- (2) 卓池 明和五（二七六八）弘化三（一八四六）三河国岡崎で紺屋を営む。（『俳文学大辞典』） 暁台から士朗門。
- (3) 沢山な月日が出来て梅花＝『清友篇』大阜編 享和三（一八〇三年）・『枇杷園句集』（文化元（二八〇四）年）他に所収。
- (4) 柳青しけふやいく日の春をへし＝『枇杷園句集後編』（文化九（二八二二）年）他に所収。
- (5) 何となくきけバきく也春の雁＝『大光寺資料遺墨』（句文横物）・『柏声舎聞書』（卓池）に所収。

16 士宅宛 十二月廿七日

（軸装。一五・七×三五・四糎）（図16）

花墨^①拝見仕候。如仰／寒冷甚御座候所、弥／御壮安被成御座奉賀候。／然ハ為年晩^②之御祝儀／銀札五匁御贈与被下／忝奉存候。書余面^③拝

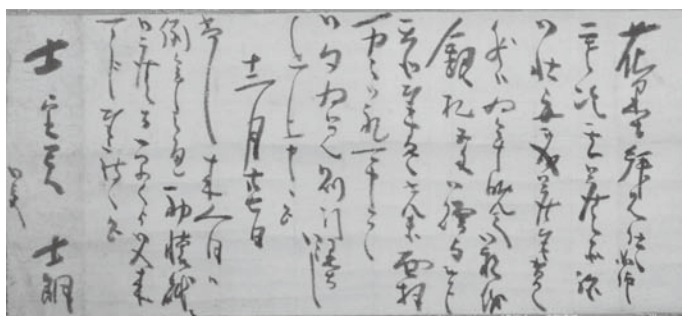


図16 士宅宛 十二月廿七日（軸装）

／万々御札可申上候。／御句為
覚則引墨いたし／返上申候。以
上

十二月廿七日

尚々来人日ハ／例年之通、初懷
紙ニ／御座候者、一早く御入
来／可被下候。奉待候。以上。

士宅君 士朗

御

（1） 年晩＝大晦日。

（2） 書余面拝＝書き尽くせぬ
ことは、お目にかかつてか
ら。

（3） 為覚（しおぼえる）＝「自
ア下一（ヤ下二）しおぼ
ゆ（自ヤ下二）物事を実際に
やってみて覚える。実践して
体得する。

（4） 人日（じんじつ）五節句の一。陰曆正月七日の称。七草粥を食べ
る風習がある。《季 新年》

（5） 士宅（宝？）＝未詳。

17 宛名不明 七月十日

（捲り。一五・四×四一・三糎）（図17）

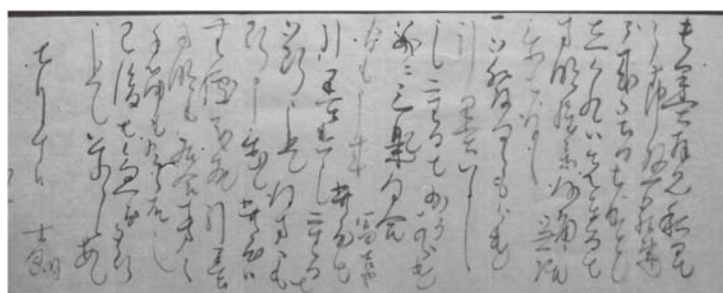


図17 宛名不明 七月十日（捲り）

貴墨拜見、秋暑／之節拝一御壮健
／被来御ちつちか候／立くれバ
先達ると／方明推参、何角御世話
／忝被存候。

一 御発句にも被遣／引墨いたし
／申候。重ると少々可被遣／前
三匙句合 富吉や／かも申来、奇
心と／引墨遣申候。重ると／御断
申上候。何方へも／断申置候。奇
心ハ／無儘義為候。引墨／方明も
居合芳く／手前も有候故也／已後
共急然御断／申上候。萬々頓首
七月十日 士朗

（1） 秋暑＝秋の暑さ。立秋が過ぎ
てからの暑さ。残暑。《季・秋》。
太陽曆では八月七～八日ごろに
あたるが、ここは陰曆七月。

（2） 方明＝本稿（二）「2字洋（大
津 塩屋新六）宛 八月十日」
に既出。三河田原の藩士、致仕
して俳諧を士朗に学ぶ。（「中京
俳人考説」）

（3） 推参＝招かれもしないのに自分からおしにかけていくこと。また、
そうする人。また、人を訪問することを謙遜という語。

（4） 急然＝たちまちに。

（5） 頓首＝書簡文や上表文の終わりに付け、相手に対して敬意を示す

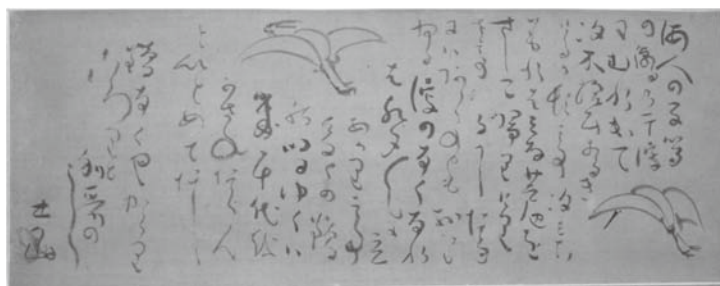


図18 宛名不明。鶴の画入り。(寛政・享和期)(軸装)

語。

18

宛名不明。鶴の画入り。(寛政・享和期)

(軸装。一七・七×一七八・〇糎+端裏六・五糎)(図18)

海人の子等／の潮の干渴^①／にむれ
出て／汐木拾ひあるき／けるが頓^②
て汐ミち／来ればミな芦辺を／さ
して帰りけり／さて驚かしたる／
にハあらねどもおり／ゐる渴のな
くなれ／ば声々に立／あがりて／
多くの鶴／の鳴ゆくハ／幾千代を
／かさねおく人／といとめてたし。
鶴なくやかからり／ころりと和
歌のうら^③

士朗

(1) 潮干渴(名) 潮がひいてあら
われた砂地。

(2) 塩木(名) (「しおぎ」とも)
塩釜で海水を煮つめるのに用い
る燃料のたきぎ。

(3) 鶴なくやかからりころりと和歌
のうら^③ 『枇杷園句集』(「文化
元(一八〇四)年」に所収。

三六

付^① 812 巨川宛、九月十八日 窓竹斎鳥川^①(寛政期)

8 「騏六・巨川・雨滴・満子宛 七月廿日」(寛政期)と同装。

(軸装の下端一四・三×五五・三糎)(図812)

一筆啓上仕候。追日冷氣増／申候所、弥御揃御安寧ニ／被為入候所
承度奉存候。誠ニ過日ハ／御立より被下折節、客来ニ付／一向早々
ニ被為帰さて／残念／の事ニ奉存候。且其御引合／申上候すり
物、追々延引出来候に／ちとしらせ候方、御座候而、萬々延引／御
引合之通ニ出来不參、漸々、／出来次第至り奉置候。再々出申候共
／御揃と大風後破損／都の御中連まいらせ給候て可被奉／申候
被奉間／二しらぬ配分仕候。／三石様は御入被下候節書候訳／二
而出来不ま、言れず則／入申候。三石丈へ向ヶさし出候。／申候。
相志とて御入込申候共／何角申上候事、持外申候。／一句申伝、前
の出候砌、御文等／追々山家にて早々ニ申給候／例の部に御定給候
返内／御出庵の砌御立より可被致も／拝面ニ御覺ず候。以上 早々
頓首

九月十八日 窓竹斎 鳥川拜

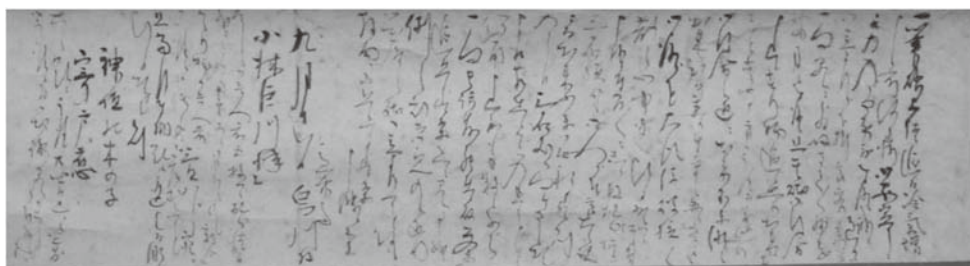
小林巨川様

尚々御三人え五様^④で配分仕候。／外ニも御入用で又々御申出候給候。
割合／下り物が六人前三様^⑤ハ下宛ニ／御座候て又々御取出し可申
候。／且西行奉納頃と取込申候而、漸々／まいらせ候、則／

神垣の木の子

寄^⑥戸^⑦恋

書候頃ニ御座候共、四日過候。花前／御座候間、御出詠早々御立被
下度候。以上



付：図8-2 巨川宛，九月十八日 窓竹斎烏川の書簡（寛政期）（軸装・下段）

- (1) 窓竹斎烏川＝狂歌師。『萩のつゆ』
〔安永三年（一七七四）刊・狂歌
本〕。『追善萩之露』（安永元年刊
編。妻の追善集。也有・晩台の
句入集。〔尾三古俳書解題〕²³⁴
次第至り＝〔名〕順々に達する
こと。
- (2) 御中（おなか）＝仲間。
- (3) 五様＝ごよう。五つの様式で、
ここは五枚のことか。
- (4) 三様＝さんよう。三つの様式で、
ここは三枚のことか。

まとめ

人気の高い士朗の書簡などは数多く残っていると思われる、本コレクシヨンはその一部に過ぎない。しかし、名古屋圏だけでなく、京や大津の俳人たちとの興味深い交流や、『去来抄』だけでなく、『猿蓑集』を薦めたこと、更には、批点の基準の一端が窺え、とても興味深いコレクシヨンであった。

士朗の書簡はこれまでも、矢羽勝幸氏『書簡による近世後期俳譜の研究』（曹裳堂書店 一九九七年）、田中善信氏『鏡泉洞文庫蔵新出俳人書簡集―白雄・士朗・嵐外・蕉雨』（新典社 二〇〇〇年）、寺島徹氏「井上士朗の書簡」(一)・同(二)「蒼穹」61・63 二〇〇三年九月・二〇〇四年一月）等に紹介・翻刻がなされてきた。更に、俳壇研究のために今後も紹介され続けるべきであろう。

付記

貴重な資料をご提供いただいた道木正信氏に謝意を表します。そして、士朗の句の出版をご教示いただいた寺島徹先生、翻字に際し、貴重なご教示をいただいた加藤定彦先生・寺島徹先生に深謝申し上げます。

誤字・誤読が多々あるかと思いますが、ご寛恕の上、ご教示いただければ幸いです。

〔四十九号訂正〕

三七頁下段「14 五雄宛 四日」を「14 五雄宛 四日（享和・文化期）」に訂正。